

令和 7 年度田原本町住民協議会

提案書

令和 8 年 4 月

目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
1. 田原本町住民協議会の概要・・・・・・・・	3
2. 町民が考える10年後の田原本町のありたい姿・・・・・・・・	6
3. 議論から見えた田原本町の「強み」と「課題」・・・・・・・・	8
4. 各分科会からの提案・・・・・・・・	10
(1) 地域のつながりづくり分科会からの提案・・・・・・・・	11
(2) かせぐ地域づくり分科会からの提案・・・・・・・・	20
(3) 未来を育むまちづくり分科会からの提案・・・・・・・・	29
5. 参加者アンケート結果（抜粋）・・・・・・・・	42

はじめに

私たちは、「第5次田原本町総合計画」の策定に向けて、10年後の田原本町の未来像をともに考えるために、今回、住民協議会に参加しました。世代も立場も居住地区も異なる多様な住民が無作為抽出によって集まり、町の将来を真剣に考え、全4回にわたる議論を重ねてきました。この提案書は、私たちが交わした率直な対話の足跡であり、未来の田原本町への切なる願いをまとめたものです。

会議が始まった当初、私たちの多くは「総合計画」という言葉をどこか他人ごとのように感じていました。「何を話せばいいかわからない」「自分の住む町なのに知らないことばかり」。少し緊張しながら初回の席に着いたのが正直なところです。そんな私たちの背中を押してくれたのは、会議の中で投げかけられた「これは、行政だけでなく住民みんなのための計画書です」という言葉でした。この一言が私たちの心に深く刺さり、この計画は、自分たちの暮らしや未来そのものであることに気づかされました。

町の歴史や現在の取り組みを知り、参加者どうしの多様な視点に触れる中で、これまで見落としていた町の魅力や、誰かが抱えている課題が自分たちの暮らしと地続きであることを知りました。そして何より、普段の生活ではすれ違うだけだった学生、子育て世代、高齢の方々などとテーブルを囲み、町の未来を語り合う経験はとても新鮮なものでした。最初はバラバラだった一人ひとりの思いが、対話を重ねるごとに、田原本町をより良くしたいという一つの大きなうねりへと変わっていきました。

最も大きな変化は、町政を「他人ごと」から「自分ごと」として捉え直したことです。町が抱える課題を「誰かが解決してくれるのを待つもの」ではなく、「私たち住民が主体となって向き合うもの」と強く実感するようになりました。当初抱いていた漠然とした不安は、4回目の会議を終える頃には、自分たちにもできることがあるという前向きな期待になりました。

こうした対話の末に、私たちが描いた「10年後の田原本町のありたい姿」は、「豊かな自然と温かいつながりを土台に、誰もが活躍できる場があり、対話で未来を創るまち」というものです。本提案書では、この将来像を実現するために、3つの分科会（地域のつながりづくり分科会・かせぐ地域づくり分科会・未来を育むまちづくり分科会）においてそれぞれの視点から議論を尽くし、具体的なアクションを提案として取りまとめています。

ここにまとめた提案は、私たちの田原本町の未来を「自分ごと」として捉え、踏み出した第一歩です。この提案が、第5次総合計画の確かな礎となり、誰もが安心して自分らしく暮らし続けられる田原本町をともに創り上げていくための原動力となることを、参加者一同、心より願っております。

田原本町住民協議会 参加者一同
令和8年4月

1. 田原本町住民協議会の概要

○テーマ：田原本町第5次総合計画の策定に向けて

田原本町では、第4次総合計画が令和8年度末をもって満了を迎えることから、令和9年度から10年間のまちづくりの羅針盤となる第5次総合計画の策定を進めています。

策定にあたっては、住民が主体的に関わる「開かれた計画づくり」を推進しており、その一環として住民協議会を開催しました。無作為に選ばれた様々な方々の視点を通し、町の将来を「自分ごと」として考え、参加者どうしで意見を出し合う有意義な議論の場となりました。

○議論の進め方

以下の3つの分科会に分かれて議論を行いました。

分科会	内容
地域のつながりづくり	福祉・健康・防災・コミュニティといった「暮らしの安心・安全」の基盤
かせぐ地域づくり	産業・雇用・インフラ整備といった「町の活力・経済」の基盤
未来を育むまちづくり	子育て・教育・文化といった「人づくり・次世代」への投資

○参加者

1) 住民協議会メンバー

無作為に抽出し案内を送付した数	2,000 件
無作為抽出の応募者数（応募率）	46 人（2.3%）
無作為抽出以外の参加者 （田原本町内の中学校・高校に通う生徒から希望者）	15 人
合計参加者数	61 人

2) 議論の進行役

■地域のつながりづくり

コーディネーター：熊井 成和（一般社団法人構想日本 フェロー）

補助スタッフ：若杉 悠里（一般社団法人構想日本 プロジェクトリーダー）

■かせぐ地域づくり

コーディネーター：中田 華寿子（一般社団法人構想日本 理事）

補助スタッフ：飯島 拓郎（一般社団法人構想日本 プロジェクトリーダー）

■未来を育むまちづくり

コーディネーター：秋元 真彦（一般社団法人構想日本 プロジェクトマネージャー）

補助スタッフ：東 善朗（一般社団法人構想日本 自分ごと化パートナー）

3) ナビゲーター（外部有識者） ※第3回のみ参加

地域のつながりづくり：平山 裕也氏（奈良市月ヶ瀬行政センター地域振興課主任）

かせぐ地域づくり：湯川 まゆみ氏(特定非営利活動法人 SEIN 代表理事)

未来を育むまちづくり：栗林 知絵子氏(特定非営利活動法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク理事長)

○各回の議論

1) 第1回住民協議会

令和7年12月14日（日）9時00分～12時00分 （田原本町役場）

- 開催概要・住民協議会の説明
- メンバーの自己紹介
- 各担当課から町の取り組みの共有・質疑応答
- 各テーマに関する課題意識などについて議論
- 各分科会の議論内容の共有

2) 第2回住民協議会

令和8年1月17日（土）9時00分～12時00分 （田原本町役場）

- 前回の振り返り
- 各テーマに関する10年後の姿や改善アイデアなどを議論
- 各分科会の議論内容の共有
- 改善提案シートの記入

3) 第3回住民協議会

令和8年2月14日（土）9時00分～12時00分 （田原本町役場）

- 前回の振り返り
- ナビゲーターの講話
- 各テーマの中間とりまとめを元に、提案する内容を議論
- 改善提案シートの記入

4) 第4回住民協議会

令和8年4月11日（土）9時00分～12時15分 （田原本町役場）

- 前回の振り返り
- 基本構想（案）の共有・説明
- 提案書（素案）について議論
- 住民協議会の感想・振り返り
- 意見提出シートの記入

<住民協議会の様子> 構想日本撮影



○各分科会の集合写真（第4回にて構想日本撮影）



地域のつながりづくり



かせぐ地域づくり



未来を育むまちづくり

2. 町民が考える 10 年後の田原本町のありたい姿

豊かな自然と温かいつながりを土台に、 誰もが活躍できる場があり、対話で未来を創るまち

次期総合計画の計画期間が終了する「10 年後」の田原本町のありたい姿を考えたときに、各回の議論を通じて見えてきたのは、都会的な利便性だけを追い求めるのではなく、田原本町ならではの「豊かな自然」や「温かい人のつながり」を大切にしながら、多様な世代が交わり、誰もが自分らしく活躍できるまちを目指したいという想いでした。

さらに、この理想のまちを話し合う中で、「行政に求めるだけではなく、自分たち自身にもできることがある」という気づきが参加者の中に芽生え、まちづくりを行政任せにせず「自分ごと」として行動し、行政と共に協働していくことの大切さも共通する認識になりました。

以下に、各分科会の議論から浮かび上がった「10 年後のありたい姿」を示します。

分科会① 地域のつながりづくり

※本分科会では「10 年後のありたい姿」を単独のテーマとした議論セッションはありませんでした。そのため、各回の議論を通じて一貫して語られた課題認識・提案の中から、参加住民が共通して目指している姿を読み取り、以下に示します。

- 地域ごとの歴史や人口構成、つながり方の違いを踏まえ、それぞれの地域に合った無理のないつながりが育っているまち。
- 子どもから高齢者まで、安心して立ち寄れ、食・趣味・学び・防災など何かのきっかけを通じて自然に出会える場が、身近に複数あるまち。
- 必要な情報がきちんと届き、住民がそれを自分ごととして受け取り、行動につなげられるまち。
- 一部のの人に負担が偏るのではなく、多様な世代や立場の住民が、それぞれの経験や得意なことを生かして役割を持てるまち。
- 日常の困りごとや災害時の不安に対して、「お互いさま」の気持ちで声をかけ合い、支え合える共助の仕組みが息づくまち。

分科会② かせぐ地域づくり

- 人々の交流があり、誰もが安心して住め、関係人口も含め住民が定着することで、町内でのさらなる消費と事業機会が生まれるまち。
- テクノロジーを活用したバイオものづくりや、新品種の改良・IT 農業など、先進的かつ持続的な稼ぐ仕組みに若い世代が積極的に取り組めるまち。
- 子育てのしやすさをきっかけに多世代が集う活気を生み出し、色々な世帯・世代が近隣で助け合いながら共に暮らせるまち。
- 住民が自由にまちのありたい姿について議論する場があり、場をリードするリーダーが育つまち。
- 一律に都市化を進めるのではなく、都市と歴史ある街並みと自然が共存し、住民が誇ることができるまち。

分科会③ 未来を育むまちづくり

- 物理的にも心理的にも安全な環境下で、子どもが地域の多様な大人と関わりながら学び、生き方に触れ、将来の選択肢を広げられる環境があるまち。
- 町内に多様な仕事があり、若者が田原本で働く場所を選べる。同世代がつながれるコミュニティや居場所があり、孤立せずに暮らせるまち。
- 年齢や性別、属性を問わず、多様な人の意見が反映され、住民どうしの対話を通じて納得解を導き出すプロセスを大切にする文化が根付くまち。

3. 議論から見た田原本町の「強み」と「課題」

3つの分科会での住民どうしの対話を通じて、テーマの垣根を越えて田原本町全体に共通する「強み」と「課題」が浮き彫りになりました。

田原本町の強み

1. 豊かな自然・田園風景と落ち着いた住環境

「少し歩けばあぜ道があり、四季を感じられる」「大阪から帰ってくるとホッとする」など、都会すぎず田舎すぎないバランスの良さと、のんびりとした田園風景が存在する。

2. 温かい人のつながりと子育てのしやすさ

「登下校時に近所の方から『おかえり』と声をかけてもらえる」「旧自治会単位を中心に、行事を通じたコミュニティがある」など人の温かさが根付いている。また、家族や親戚のサポートが得やすく、子育てがしやすい環境がある。

加えて、自治会や伝統行事、学校ボランティアなど、世代を超えて地域と関わる土台が今も残っている。

3. 古くからつながる豊かな歴史と文化

太安万侶、卑弥呼、唐古・鍵遺跡など、日本文化発祥の地とも言える田原本町は、誰もが教科書で学ぶ日本の歴史まさにそのものである。

また、地車（だんじり）や祇園祭に代表される祭りごと、魚町や茶町といった古き良き生活の営みを感じさせる地名、当時の有志により設立された大和鉄道（現：近鉄田原本線）など、知れば知るほど町のことに誇りを持つことができる奥深さを有している。

4. 住民自身が可能性を感じている魅力的な施設

ジャンルが豊富で規模の大きい「図書館（青垣生涯学習センター）」や、新鮮な地元野菜が買える「道の駅（レスティ唐古・鍵）」など、住民自身が魅力を感じ、誇りに思える拠点が町内に存在している。

加えて、地域には百歳体操の場や寺・公民館など、住民活動の基盤となる拠点が点在している。

5. 県外・周辺都市への交通アクセスの良さ

「電車（急行）を使えば大阪や京都にすぐ出られる」「バイパスなどの道路網が整備されている」など、周辺都市へのアクセスが良い。

田原本町の課題

1. 地域活動の担い手不足・高齢化と負担感

自治会、民生委員、PTA、防災組織、さらには農業などにおいて、「いつも同じ人に負担が集中している」「若い世代が入りにくく、後継者がいない」という声が上がっている。義務感や重い負担感から、コミュニティの維持が難しくなっている。

また、地域によってつながりの濃さが異なり、旧来のやり方がそのまま通用しにくいことも、担い手づくりを難しくしている。

2. 町内移動の不便さと生活道路の安全性

県外へのアクセスが良い一方で、「駅からの動線が親切ではない」「通学路や地元の道が狭くて危ない」といった幹線系統以外への不満や、図書館や集いの場に行くにも「大きな道路や横断歩道が怖い」という声があり、高齢者の免許返納後・子どもの移動手段として、町内の「ラストワンマイル（身近な移動）」を埋める足の確保が必要とされている。

3. 多様な「働く場所」の不足と若者の流出

「働く場所や多様な仕事の選択肢がないため、子どもが進学や就職を機に町を出て行ってしまう」「若い人が田原本で働く場所を選べない」「同年代とつながれる場所がないと定着しない」など、若者を惹きつける仕事や定住を促す環境の整備が求められている。

4. 情報が届かないコミュニケーションのギャップ

広報誌や SNS などでは情報は出ているものの、「自分に関係がある情報だと思えない」「何をやっているのか分からない」という声が多く聞かれる。地域に関わりたいと思っていても、そのきっかけや方法が分からないという情報伝達が課題となっている。

5. 目的がなくても集まれる「居場所・憩いの場」の不足

子どもにとっては「ボール遊びができる魅力的な公園がない」、大人にとっては「夜に外食できる場所が少ない」「既存の公民館などは目的が限定されており、ふらっと立ち寄りにくい」など、世代を超えて気軽に交流・滞在できる第三の居場所が不足している。

4. 各分科会からの提案

本提案は、各委員が第2、3回会議で記入した「改善提案シート」と第4回会議で記入した「意見提出シート」の内容及び、各回の協議内容を踏まえ取りまとめたものです。

4-1. 地域のつながりづくり分科会からの提案

提案1	目的がなくても「集まれる場」として使える「余白のある多世代交流スペース」の創出
提案2	趣味や防災を入り口とした「参加のハードルを下げる仕組み」づくり
提案3	特定の人々の善意に頼らず、自然につながり負担を分散する「ゆるやかな仕組み」づくり
提案4	地域の「つなぎ役」を可視化し、心理的・物理的ハードルを下げる支援体制づくり
提案5	日常の「楽しさ」や「共通の関心」を起点にした、やりがいのある活動づくり
提案6	「ゆるやかな関係」を肯定し、多様な関わりの濃淡を選べる仕組みづくり
提案7	情報の「自分ごと化」を促す、受け手に合わせた多角的な情報発信と受信アンテナの構築

4-2. かせぐ地域づくり分科会からの提案

提案1	ようこそ田原本へ！免許センター移転をきっかけに、寄りたくなるまちを住民×行政で共創する
提案2	お金も笑顔もぐるぐる回る。食べる・遊ぶ・集まるを田原本町で実現する
提案3	住民みんながセールスマン。歴史と食の魅力を紡ぎ、町のファンを増やす情報発信
提案4	「歩いて楽しい」が稼ぐ力に。名所と人をつなぐラストワンマイルの快適移動ネットワークをつくる
提案5	「稼げる農業」で田原本の土地を守る！空き家×農業で担い手を呼び込む
提案6	まずは「みたらし団子の会」から。小さな成功体験を積み重ねながら地域のリーダーを育む
提案7	「近隣で一番子育てがしやすいまち」を目指して。定住できる環境をつくる

4-3. 未来を育むまちづくり分科会からの提案

提案1	住民の経験・特技を活かした「地域に開かれた学校」と子育て支援の仕組みづくり
提案2	住民が使いこなす「居場所」への転換と、多世代が安心して交流できる場づくり
提案3	多様な働き方の選択肢の創出と、小学生から始めるキャリア教育の整備
提案4	若い世代が住みたくなるまちの魅力発信と、定住できる「住まい・土地利用」の環境整備
提案5	全ての住民が対話を通じて参画できる、開かれたコミュニティの仕組みづくり
提案6	受け手の目線に立った、情報が「届く」仕組みと「自分ごと化」の促進
提案7	住民一人ひとりの環境美化と魅力発信で、「住んでいて良かった」と誇れるまちづくり

4-1. 地域のつながりづくり分科会からの提案

第1回、第2回の会議では、地域のつながりに関わる4分野（健康・長寿介護・防災・コミュニティ）それぞれの現状や解決策を議論してきました。第3回からは視点を広げ、各取り組みに共通する重要課題として、情報・認知、場・空間、仕組み・制度、人・役割、動機・感情、関係性の質、機会という7つのテーマに分けて議論を行いました。また、奈良市月ヶ瀬での実践事例から「まずは行動を起こし、繰り返し泥臭く活動することの大切さ」を学び、人のつながりは「作られるものではなく作るもの」であり、新しい一歩を踏み出すには軽い強制（仕掛け）も必要であるのではないか、ということを経験しました。私たちは、10年後の田原本町が、誰もが気軽に立ち寄れる「余白のある場」を持ち、多様な関わり方が許容され、普段はゆるやかでもいざという時に助け合える「顔見知りの関係」が自然に広がるまちを目指します。

提案1

目的がなくても「集まれる場」として使える「余白のある多世代交流スペース」の創出

公共施設や公民館など、集まることができるスペースがあっても、現状は利用目的が固定されていたり、用事がないと行きづらかったりするため、自然発生的な交流や世代間の接点が少なくなっています。そのため、特定の目的を持たずにふらっと立ち寄れるような、気軽な居場所づくり、集まることができる場づくりと、役場・避難場所・公園・寺などの既存空間に加え、移動図書館のような「動く場」も活用することを提案します。

提案1の実現に向けてそれぞれが行うこと

個人の役割	● 行事の時だけでなく、普段から施設を使わせてもらえるよう働きかける。 ● イベントへの参加だけでなく、日常的な小さな接点を大切にする。 ● 過去になぜ施設が使えなくなったのかを考え、整理する。 ● まずは1人からでも参加し始める。
地域の役割	● 公民館や集会所を役員会以外の用途で開く時間帯をつくり、使えなくなっている公園なども開放する。 ● 駄菓子屋、ゲーム、本など「用事のない理由」を用意し、管理しすぎない緩やかなルールを共有する。 ● 高齢者と若者が共通に楽しめる場所をつくり、容易に利用できるシステムを構築する。
行政の役割	● 公共施設を偶発的交流のインフラとして再定義し、「失敗してもよい運営」を前提とした支援制度を設計する。 ● 役場のフロアや災害時の避難場所を、誰もが立ち寄れるフリースペースとして開放・活用する。 ● 場所を固定せず、移動図書館や移動式の公園を地域に巡回させる。

	● 高齢者の移動負担を考慮した、行きやすく安全な公的空間（広場など）を見つけ、地域の現状を紙にまとめて住民に配布する。
その他	● 設備のある場所を開放する。

会議での住民の声

- 「たまに」でも「ちょっと」でも集まる場所がやっぱりあってほしい。「たまに」、でも「ちょっと」。本当にキーワードかもしれない。
- 公民館は役員の方が集まる場所という感覚ですね。そういうのをやるときだけ借りていて、個人で行くことはまずない。
- 中高校生は公民館には行かず、イオンモールやスポッチャのような場所に行ってしまうため、中高校生も遊べるスペースやスイーツのお店があったらいいなと思います。
- 天候に関係なく子どもが走り回れたり、中高生もアクティブに遊べるボルダリング場やボーリング場のような、気軽に入れる環境があると人が集まると思います。
- 高齢化に伴い行動範囲が狭まるため、中央への一極集中ではなく、津島神社の広い空き地や統合される学校の跡地などを活用し、地域ごとに歩いて行ける分散型の拠点が必要ではないか。
- 集まれる場として、ラーメンフェス等を開催するみたいな案もよいかと思います。田原本町には8軒ほどラーメン屋さんがあり、人気店もあるため、若い人たちは参加しやすいと思います。

提案2 趣味や防災を入り口とした「参加のハードルを下げる仕組み」づくり

地域の行事が縮小し、ライフステージの変化（退職や子育ての終了、転入など）で地域社会との接点が途切れやすくなっています。また、既存のコミュニティは知り合いがいないと参加しづらいため、祭り・餅つき・食・趣味・防災・学びなど、何らかの動機がある方が最初の一步を踏み出しやすくするきっかけづくりを提案します。

提案2の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 自治会の行事にできるだけ参加するように心がける。 ● 様々なイベントに参加する。 ● 町外の魅力的な場所で得た刺激や情報を、町内に持ち帰って新たな活動につなげる。
地域の役割	● 住民についてできるだけ把握・理解し、転入してきた人が地域に入るきっかけを提供する。 ● 特定の趣味（ゴルフの打ちっぱなし等）や、地域の祭り・餅つきなどをフックにした機会を設ける。 ● 相談するほどではないが話せる機会をつくり、容易に利用できるシステムを構築する。 ● 広い世代が関われるように、直接の対面だけでなくリモートや電話などの手段も活用してイベントを開催する。
行政の役割	● まずは行政と自治会の関係づくりをしっかりと行う。 ● AEDの講習や防災訓練など、「命を守る」「災害に備える」といったテーマのイベントや防災体験を設け、関心を持ってもらう。 ● 外出の機会が減少している高齢者に向けて、外に出る用事や行き先をつくる。 ● 仕組みづくり、システムづくりのサポートを行う。

会議での住民の声

- 最初にちょっときっかけがなかったら、やっぱり話ができない。
- 何かの折に集まって話をすることや聞くことが大事。
- マルシェでのワークショップや文化祭など、趣味(手芸や木彫りなど)で作成したものを発表・販売できる場があると、それをきっかけに新たな参加者が増えるのではないかな。
- 新しいことを何か始めるには、「軽い強制」みたいなものがあった方がいいかなと思いました。

提案3	特定の人々の善意に頼らず、自然につながり負担を分散する「ゆるやかな仕組み」づくり
-----	--

現在は特定の人々の頑張りや善意に寄りかかっている現状があり、一度引き受けると負担が重くなることも多く、担い手が不足しています。そのため、役割を固定せず複数人でゆるく関わり、別の目的のなかに自然につながりを組み込む仕組みの転換を提案します。

提案3の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● ボランティアとして、清掃活動などに参加する。 ● 自治会の行事にできるだけ参加する。 ● 支援する人にならなくても、見かけたら挨拶する・気にかける。 ● 頼ることを弱さではなく関係づくりの一部と捉え、高齢者自身も、支えられる側に固定されない。
地域の役割	● 様々なボランティア活動を提案して集まりを呼びかける。 ● 住民についてできるだけ把握し、理解する。 ● 見守りを役割化せず、複数人でゆるい関わりに分散し、「助ける／助けられる」を固定しない文化をつくる。 ● 自動的な順番・持ち回りで交代していく仕組みを導入し、世代混在の活動に自然に参加できる設計にする。 ● 小さな役割設定や順番制などで、無理なく役割を回していく。
行政の役割	● 行政と自治会の関係づくりを行い、行政から住民へ公式な委嘱状などを出すことで人を集めやすくする。 ● つながること自体を目的とするのではなく、別の目的（食事や趣味など）の中に自然とつながる仕組みを組み込む。 ● 介護や見守りを専門職だけに閉じない制度設計をし、心理的安全性・頼りやすさを重視した施策評価を行う。
その他	● AI を使った軽い接点づくり。

会議での住民の声

- 最初は「ゆるく」という感じで始めると、だんだん目的が出てきて、こういった話が自然発生的に出てくる。
- 「主体的に何かをしなければならない」という義務感だけになってしまうと、自分自身の負担になってしまいます。そうすると、誰もやりたがらないということになるかもしれません。
- 委員などは持ち回りにしています。2年やったら次は交代というふうに、自動的に人が変わっていくように努めています。

提案4	地域の「つなぎ役」を可視化し、心理的・物理的ハードルを下げる支援体制づくり
-----	---------------------------------------

実質的に地域を支えている人がいても役割として見えにくく、行政などとの連携が取りづらい課題があります。また、「余計なお世話と言われるかも」という心理的ハードルや、民生委員などの負担の重さも足かせとなることから、こうした人たちを適切に評価・支援することや、元気な高齢者や経験を持つ住民、地域団体などを含めた「つなぎ役」を見える化するなど、活動しやすくする支援体制をつくることを提案します。

提案4の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 担い手として、元気な高齢者を人的資源として利用する。 ● 介護や健康の情報を、日常の会話の中で伝えてくれる存在になる。
地域の役割	● フレイル予防を地域で呼びかけ、相談を受けるだけでなく声をかけに行く人を作る。 ● 民生委員は負担が大きくなることも多いため、負担を減らせるようにする。 ● 元気な高齢者や経験を持つ住民、地域団体も「つなぎ役」として位置づける。
行政の役割	● つなぎ役の存在をより見える化し、その役割を周知する。 ● 担い手のリーダーづくりのルールを引き、サポートをする。 ● フレイル予防を呼びかける人を当番で決めたり、専門職だけでなく身近な立場でつなぐ人（災害コーディネーターなど動ける人）を配置する。 ● つなげる人を評価し、支援する仕組みづくりを行う。 ● 特定の人への負担集中を防ぐため、住民どうしの「困りごと」と「得意なこと（スキマ時間）」をデジタルでマッチングする仕組み（単発・気軽なボランティア参加アプリ、田原本住民版タイミー等）の導入を検討する。 ● 参加者の「失敗したら責められるのでは」という心理的ハードルを下げるため、マッチングを通じた活動に伴う事故や怪我を補償する「市民活動保険」の自動適用や、トラブル時の「SOS 相談窓口」などのバックアップ体制（心理的安全性の担保）を整備する。

会議での住民の声

- 民生委員という制度は知っているけれども、「うちの地区の民生委員、誰だっけ？」ということになると、つなげる人が見えにくくなってしまう。
- つなぐ人になってしまうと責任が重い。「民生委員は必要なのだけれど、やりたくないな、大変だな。」と思ってしまうような状況があるので、つなぐ人がどうしても増えないのではないかな。
- （防災士として地域活動を引き受けた理由は）やりがいがありそうだから。

提案5	日常の「楽しさ」や「共通の関心」を起点にした、やりがいのある活動づくり
-----	-------------------------------------

つながること自体が目的になってしまうと負担になり、楽しさや意味が見えないと活動は続きづらくなります。また、特定の役割がある時しかつながれないという課題もあります。そのため、食や運動といった多くの人から関心を持たれやすく、参加しやすい手段を起点として、住民がやりがいや自分ごととして捉えられるような動機づくりを提案します。

提案5の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 他の地域の取り組みを知ることによって自分ごととして捉え、やりがいや人助けの実感を持つ。 ● 防災訓練よりも先に、顔と名前を知る関係をつくる。 ● 雑談や声かけ、共通の関心事を起点にして関わる。
地域の役割	● 地域活動のやらされ感を減らし、楽しさや納得感をもたせる。 ● 災害時をバーチャルに体験できる行事や、食べること・運動することなど、自然につながりが生まれる場をつくる。 ● 「最近どう？」と近況を共有する場や、世代混在の小さな場（お茶会、散歩、ゲームなど）を定期化する。 ● 田原本の魅力を再発見する見学や交流の機会も取り入れる。
行政の役割	● 「災害時に助け合う必要がある」といった、命に関わるような必要性や危機感を伝えて参加につなげる。 ● ハザードマップの周知だけでなく、人のつながりを可視化する仕組みをつくる。 ● 数値目標だけでなく、関係性の有無や参加のしやすさで評価する。

会議での住民の声

- うちの旧自治会では、お年寄りが集まって、毎日あちこちに集まってお茶を飲んだり、いろんなことをしていました。
- 飲んだり食べたりというのは、心の距離を縮めると思います。
- 語学などの特技をボランティアで活かす機会や、共通の関心を持つ仲間がいる安心感など、人それぞれの楽しさややりがいを共有し合うことが参加の強い動機になるのではないかと。

提案6

「ゆるやかな関係」を肯定し、多様な関わりの濃淡を選ぶ仕組みづくり

密接すぎるつながりが、監視や干渉として敬遠される傾向があります。コミュニティに入るには「深く関わらないといけない」というプレッシャーが気軽な交流の芽を摘んでおり、多様な背景が考慮されず一律のスタイルが適用されていることも課題です。ただそこにいて顔を知っているだけの「ゆるやかな関係」を評価し、それぞれのペースで関われる柔軟性を提案します。

提案6の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 困ったときだけ相談できたり、いざというときに助け合えたりする、最低限の情報共有で済む関係を築いておく。 ● 地域の行事などのときに、できるだけ顔を出す。
地域の役割	● お祭や行事などを、現代に沿うように変えつつ意識して継続していく。 ● 役割を担う人を増やすのではなく、関わりの濃淡を許容する設計にする。 ● 義務や強制ではなく、「たまに」「ちょっと」だけ参加できるような、ゆるやかな関係性をつくる。 ● 古くからある地域・新興住宅地など、地域ごとの違いを踏まえた運営を検討する。
行政の役割	● 制度説明を前面に出すのではなく、日々の生活実感をベースにした対話設計を行う。 ● 住民が関わり方を選べるような仕組みをつくる。
その他	● 対話型ワークショップや、ケア×アート／遊びのプログラムを提供する。 ● 高齢者と若者が一緒に参加できるような、非医療・非福祉型の活動を設計する。

会議での住民の声

- つながること自体を目的にやっているわけではなくて、美味しいものを食べたりとか、そういったきっかけがないとつながることが難しい。
- 人のつながりというのは「作られるもの」じゃなくて「作るもの」だと思っています。
- こういった会議があって、全員幅広い世代の人たちが話し合う場があったら、自然とそういうつながりの場に繋がっていくのかなと思います。
- 「今日は行けないけど、次は行くね」と気軽に断ることができる適度な距離感(ゆるやかな関係)が、現代における持続可能なつながりには不可欠。
- 価値観や背景が人それぞれ違うことを大前提とし、上下関係ではなく対等な立場で付き合える環境づくりが必要。

提案 7

情報の「自分ごと化」を促す、受け手に合わせた多角的な情報発信と受信アンテナの構築

行政サービスや防災、フレイル予防といった重要な情報が発信されているものの、知られていなかったり、受け手に「自分には関係ない」と受け流され、本当に必要な人に届いていない懸念があります。そのため、ただ情報を出すだけでなく、世代や生活環境に合わせて情報を分かりやすくし、日常の中で自然に情報を受け取れるような仕組みづくりと、住民自身の関心を高める意識づけや口コミ・住民発のLINE など、公式発信だけでなく日常の会話の中で情報が回ることが必要であることを提案します。

提案 7 の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 田原本について調べ、周りに共有する。 ● 広報誌や回覧板などの情報に対し、自分から情報を取りに行くという受信アンテナを持つ。 ● 発信された情報を単なる行政情報としてではなく、災害時のリスクなど、自分の生活に直結する課題（自分ごと）として受け取る。 ● 災害時の話を「怖い話」ではなく世間話の延長で共有したり、自宅・家族単位でのゆるい避難イメージを持ったりする。 ● SNS などでも情報を発信したり、知ろうとしたりする。
地域の役割	● 自治会館を使って説明会を行ったり、防災イベントを訓練ではなく交流イベント化したりするなど、情報に触れやすい場を作る。 ● 1 回の発信で終わらず、繰り返し情報を伝えていく。 ● フレイルについてまとめた資料を作成し、たくさんの人に送る。
行政の役割	● 情報をポータルサイトや公式 LINE、Instagram などに集約し、一元的に見られるようにする。 ● デジタルだけでなく、アナログ（全戸配布や新聞折込、回覧板など）での継続的な情報発信を行う。 ● 児童・生徒を通じて各家庭に配布したり、地域振興券などのインセンティブを付けて読まれるための工夫をする。 ● 知人が掲載されていると住民は読む傾向にあるため、住民参加型の記事を前方に配置するなど、レイアウトを工夫する。 ● 危機感を煽るのではなく日常に溶け込ませるような形で推進したり、使いやすいポスターを作成して地域の特色を交えながら伝えたりする。

会議での住民の声

- 回覧板が回ってきても、さらっと見てしまい、情報は世の中にあるが、知らないことも多い。自分から知りたいという気持ちがあれば、情報を取りに行けると思います。
- 「繰り返し繰り返しやるしかないな」と思ってやっています。回覧板に情報を入れてもらい、

そういうことを継続する形で浸透させていっている。

- やっぱり一番大事なのは情報だと思います。情報が行き渡らなかったら、何も広げることも人も集まることもできないので、地道に情報発信することが一番大事だと思います。

4-2. かせぐ地域づくり分科会からの提案

第1回・第2回で「住民目線での田原本の魅力と課題」を洗い出し、「行政がどう稼ぐか」という視点から、「稼ぐための土台は、人が住みたい・働きたいと思える魅力的なまちであること」という共通認識へと議論が深まりました。第3回では、大阪府堺市の泉北ニュータウンでの実践事例から「まちに命を吹き込むのは住民の役割」という学びを得て、「小さな成功体験を積み重ねる」ことの大切さを共有しました。

私たちは、10年後の田原本町が、住民が「このまちが好きだ」と胸を張って言えるまち、地域の中で「役割」と「稼ぎ」がめぐる活気あるまちを目指します。

提案1

ようこそ田原本へ！免許センター移転をきっかけに、寄りたくなるまちを住民×行政で共創する

年間40万人以上の来訪が見込まれる運転免許センターの移転は、田原本町にとって千載一遇のチャンスです。しかし、現状のままでは「用事を済ませてすぐに帰る」だけの場所になりかねません。伊勢神宮の「おかげ横丁」のように、そこを通らないとたどり着けない魅力的な導線や施設を作り、「ついでに寄りたくなるまち」へと変えていく必要があります。その受け皿として、かつて商業で栄えた駅東側の空き家・空き店舗を活用し、カフェや飲食店など新たな魅力拠点を生み出すことも重要です。新しい施設を作るだけでは人は集まりません。既存の施設に新しい命を吹き込みながら、免許センター周辺と駅東側エリアをどのようなエリアにしたいのかを住民どうし、住民と行政の間で議論し、5年後・10年後を見据えたまちづくりを住民と行政が連携して共に創ることを提案します。

提案1の実現に向けてそれぞれが行うこと

個人の役割	● 来訪者に対して、SNSなどで「ついでに寄れる」おすすめスポットを発信する。 ● 東側の古い町並みの良さを再発見し、雰囲気を楽しむ。 ● 空き家や公共空間を活用して、自分の趣味や特技を生かした小規模なイベントを企画してみる。 ● 日頃から図書館を積極的に利用する。
地域の役割	● 駅前やセンター周辺で、待ち時間に立ち寄れるマルシェやイベントを企画する。 ● 「ようこそ田原本へ」といった歓迎の意を示すのぼり旗などを設置し、来訪者の気分を盛り上げる。 ● 商店街の空き店舗を活用し、カフェや民泊など新しい店舗を誘致する雰囲気づくりを行う。 ● 免許センター周辺のまちづくりについて、住民どうしで議論する活性化プロジェクトを立ち上げる。
行政の役割	● 図書館にカフェ併設の飲食スペースや有名カフェを誘致する。その際は、図書館の雰囲気を崩さないデザインを検討する。 ● 「ラーメン横丁」のような、町外の人も食事目的で訪れたいくなる集客施設・飲

	食ゾーンを検討・誘致する。 ● 駅からセンターへの分かりやすい誘導看板やサイン計画を整備する。 ● 免許センターのネーミングライツなど、新たな収入源を検討する。 ● 駅東側エリアの開発方針について、住民との対話を重ねたうえで決定する。 ● 空き家のリノベーション支援や、駅前広場・空き家バンク物件など住民がチャレンジしやすい場所の提供・仲介を行う。
--	--

会議での住民の声

- 免許センターは鍵になる施設だが、駅から距離がある。バス移動だけではお金が落ちない。伊勢神宮の『おかげ横丁』のように、そこを通らないといけない魅力的な導線や施設がないと、ただ行って帰るだけになる。
- 免許センター周辺をどのようなエリアにしたいのかを住民どうしで議論し、行政に提案していく。5年後、10年後を見据えてルートの活性化などを考えていくと面白くなっていく。
- 免許センターの移転による様々な効果は考えられるが、10年で変化は大きいと思う。免許を更新しない人(高齢者)、免許を取得しない人(若者)も増えていくと思われる。自動運転の会社を積極的に受け入れ、アピールしてはどうか?(センターの更新にあわせてPRする。)免許センターの他、国保病院、リハビリセンター等への移行をしてはどうか?
- もともと銀行だった建物をカフェにしたり、防音性もあると思うのでカラオケを導入できるのではないかな。

提案2	お金も笑顔もぐるぐる回る。食べる・遊ぶ・集まるを田原本町で実現する
-----	-----------------------------------

「夜8時以降に開いている店がチェーン店に限られる」「外食する日は車で町の外に出てしまう」これが田原本の現実です。食事や買い物で橿原市などの近隣市へお金が流出している一方、若者や子ども連れが町内で遊べる場所も不足しています。「ナイトマルシェ」のような夜のにぎわい創出や、空き家・空き店舗を活用した新たな出店支援、子どもが思い切り遊べる公園の充実など、町内で「食べる・遊ぶ・集まる」を完結できるまちを目指します。

提案2の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 町内のスーパーやガソリンスタンド、個人店を意識的に利用し、地元にお金を落とす。 ● 友人との集まりや外食の際は、町内の個人店を選ぶ。 ● どんな店が増えたらいいか、考えて声を上げる。
地域の役割	● 地元の飲食店を利用した婚活パーティーなどを開催し、店を知ってもらうきっかけを作る。 ● 子どもたちが楽しめるイベントを企画し、地域内での楽しみを作る。イベントは手作りポスターを作成したりして、来てもらえるようにアピールする。 ● 子どもが迷惑な行動をとったら禁止するのではなく、悪いことも小さいうちに経験し、それを注意するような見守りをする。
行政の役割	● 夜間に営業する飲食店の開業支援や「ナイトマルシェ」のような夜のにぎわい創出をPRする。 ● 町内で食事ができる場所をまとめたマップや情報発信を強化する。 ● ボールが使える公園の現状を調査し、子どもが思い切り遊べる場所を充実させる。 ● 唐古・鍵遺跡の広場に遊具を設置することを検討する。その際は、歴史の風景を感じることでできるデザインを検討する。 ● 空き家を活用したカフェや店舗の開設を支援する。

会議での住民の声

- 家で食事をする文化が根付いているが、免許センターに『ラーメン横丁』のような施設ができれば、町外の人だけでなく住民も利用するかもしれない。
- 新しいガソリンスタンドができた。これまで違う市町村でガソリンを入れていたけど、今後は町内のスタンドを使っていく。ガソリン以外でも町内でやれることがあれば町内でやりたい。

提案3

住民みんながセールスマン。歴史と食の魅力を紡ぎ、町のファンを増やす情報発信

唐古・鍵遺跡、太安万侶、卑弥呼。田原本町には豊かな歴史資源が点在していますが、それらがストーリーとしてつながっておらず、住民自身も地元の魅力を十分に知らない状況です。醤油蔵や道の駅などの良い素材があっても、行政のPRが追いついていません。まずは住民自身が地元の魅力を実感し、「自分の言葉」で発信することが、田原本を外に発信していく第一歩です。歴史資源を巡るツアーや周遊ルートの構築、唐古・鍵遺跡の魅力向上などを通じて、地域資源の価値を最大化することを提案します。

提案3の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 他の地域の人（友達）などに、田原本はこんなところだと話したり、紹介したりしてみる。 ● 友人や親戚が来た際に、唐古・鍵遺跡や道の駅、醤油蔵などを案内する。 ● 地元の食材を食べ、場所を訪れ、その良さを実感し、SNS やリアルな口コミで「自分の言葉」として発信する。 ● Instagram などを活用して田原本町のことを投稿する。
地域の役割	● 「太安万侶」「卑弥呼」などの歴史的背景を活かした商品・お土産を開発し、のぼり旗でアピールする。 ● 口コミで地元の良さを広げ、住民自身がPR マンになる。
行政の役割	● 吉野ヶ里遺跡のような、歴史体験や復元を含めた大胆な魅力向上策を検討する。 ● 歴史資源を巡るツアーや、田原本を起点とした周遊ルートを構築する。 ● 文部科学省の資料（一家に一枚 日本列島7億年）を用いて、歴史教育と防災教育を合わせて行う。 ● イベントや町の魅力を、まずは住民にしっかり届けるための SNS などの広報を強化する。 ● 地元食材を食べたときに感想を書き込めるサイトを作成する。 ● せっかく有名な観光大使がいるので、もっと活用する。

会議での住民の声

- 地元の農産物である美味しいお米などをまずは住民自身が知り、食べて、それを外へ発信することがスタート。
- 若いときは田原本には行くところもなく、食べるところもないので、友人を連れてくるのがなかった。友人を連れてきたり案内したりできる場所が増えれば、住民一人ひとりがPR することができる。

提案4	「歩いて楽しい」が稼ぐ力に。名所と人をつなぐラストワンマイルの快適移動ネットワークをつくる
-----	---

駅や拠点間の接続が悪く、徒歩や自転車での移動がしにくい田原本町。良いスポットがあっても案内が不十分でたどり着けないという声もあります。免許センター、駅、観光地をつなぐ分かりやすい誘導看板の整備や、歩行者が安全に回遊できる道路環境、町内の「ラストワンマイル」を埋める移動手段の検討を通じて、まちを歩いて巡る楽しさを稼ぐ力に変えていくことを提案します。

提案4の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 車だけでなく、徒歩や自転車で町を巡り、歩いて楽しいルートを発見する。 ● 歩きながら道路の危険箇所や分かりにくい場所を確認し、気づいたことを町に報告する。
地域の役割	● 迷いやすい場所に、地域ならではの手作りの案内や目印を設置する協力を行う。 ● 信号無視が多い箇所に注意喚起の看板を立てるなど、地域の交通安全に取り組む。
行政の役割	● 免許センター、駅、観光地をつなぐ分かりやすい誘導看板やサイン計画を整備する。 ● 歩車分離や一方通行化などにより、歩行者が安全に回遊できる道路環境を整える。 ● 町内の「ラストワンマイル」を埋める移動手段やルートを検討する。 ● 茶山台団地のような団地型グリーンスローモビリティ（小型電動車両）のような、誰もが乗れるものを導入する。

会議での住民の声

- 県外へのアクセスや道路の整備は進んでいるが、町内のラストワンマイルの移動が不便。歩きやすくする工夫や、案内看板の設置で回遊性を高めるべき。

提案5

「稼げる農業」で田原本の土地を守る！空き家×農業で担い手と呼び込む

農業だけでは稼ぐのが難しく、担い手不足や耕作放棄地が増加しています。一方で、温暖化による気候変動を逆手に取り、田原本でマンゴーのような新しい品種に挑戦したり、ITを活用したスマート農業を導入したりする可能性もあります。また、空き家バンクと連携して、農業をしたい移住者を住居とセットで受け入れる体制づくりも重要です。農地の集約や法人化も含め、「稼げる農業」への転換を提案します。

提案5の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 農業の現状、食料危機を機会あるごとに伝える。 ● 地元の野菜や農産物をスーパーや直売所で積極的に購入し、農家を支える（地産地消）。 ● 新しい品種や栽培方法に挑戦する若手農家を応援する。
地域の役割	● 各地域で作られた野菜を販売する「やすまる市場」のような取り組みを行う。 ● 農業法人を立ち上げる。 ● 農業における「共助」の精神で、地域の農地を守る。 ● 地元の企業の魅力を知り、子どもたちに伝える。
行政の役割	● 農地集約や法人化を手助けする。 ● 空き家バンク等と連携し、農業をしたい移住者を受け入れる体制づくりを行う。 ● 高付加価値な農産物（マンゴーや新品種など）への挑戦を支援する。 ● オープンファクトリーなどを通じ、地元の仕事を住民に知ってもらう機会を創出する。 ● 単発ではなく、継続的に子供たちが農業に親しむ機会を継続的に作る。 ● 農業に関心を持つ人が参入しやすいシステム作りのために、貸農園の整備、道具の貸し出し、近隣農家による指導体制など、個人・地域・農業団体・行政が一体となる組織作りを行う。

会議での住民の声

- 温暖化で気候が変わる中、田原本で作るマンゴーのように新しい品種改良やITを使った農業を若い人が担ってくれと良い。

提案6

まずは「みたらし団子の会」から。小さな成功体験を積み重ねながら地域のリーダーを育む

「行政任せ」にしないで、住民自身が「やってみたいこと」を実現できる場や機会が不足しています。第3回の会議では、大阪府堺市の泉北ニュータウンでの実践事例から、「まちに命を吹き込むのは住民の役割」という学びを得ました。いきなり大きな事業を目指すのではなく、みたらし団子を囲んでおしゃべりする「みたらし団子の会」のようなカジュアルな集まりから人のつながりを育み、それぞれの「好き」や「得意」を持ち寄り、小さな成功体験を積み重ねることで、まちへの愛着と次のチャレンジが生まれます。さらにそこからリーダーが生まれ、まちが活性化していくような、持続的に「役割」と「稼ぎ」の両輪が回るまちづくりを提案します。

提案6の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 昔の自治会単位のコミュニティは外の人が入りにくく閉鎖的に感じられるので、家を開放して交流の場を作る。 ● コミュニティに参加したり、コミュニティの存在を周りの人に広める。 ● 社協やボランティア団体に協力して、世代を超えた交流の手助けをする。 ● 「この協議会に来るまでは後ろ向きだったが、実際に来てみると皆さん前向きだった」その一步を踏み出す。
地域の役割	● 新しい挑戦をする人を応援し、参加する雰囲気を作る。 ● 地域の住民が立ち上がって町おこしの組織を作る。 ● 住民協議会のような場を継続的に設けて、話し合いを続けていく。
行政の役割	● サロン・コミュニティ活動に補助金などを出す。 ● 住民の声を徐々にでも実現させ、実現させたことを大きくアピールする。 ● 「ナイトマルシェ」やキッチンカー出店など、住民がプレイヤーとして参加できるイベントを継続・支援する。 ● 地域のキーパーソンや各種団体をつなげるコーディネーターの役割を担う。 ● 活動を開始する際の初期資金サポートや規制緩和を行う。 ● リーダーやキーパーソンの育成において、報酬を含む仕組みづくりを検討する。 ● 住民のコミュニティ活動を継続させるために活動場所を提供する。 ● コミュニティ育成のための拠点づくりを行う。

会議での住民の声

- みたらし団子をネタにして、地域で仲よくなっていく。その時に来れば、毎回みたらし団子が食べられるから、みんなが楽しくなるのではないか。
- まちに命を吹き込むのは住民の役割。どれだけハードを整えても、それを使いこなす住民がいなければ意味がない。

- 強力な個人リーダーに全てを背負わせるのではなく、具体的な課題を設定して関心のある住民を募り、意見を集約していく方法もあるのではないか。
- この協議会に来るまでは後ろ向きだったが、実際に来てみると皆さん前向きに田原本について考えていて、次からも参加しようと思えた。こういう場も継続する理由になり得る。

提案 7

「近隣で一番子育てがしやすいまち」を目指して。定住できる環境をつくる

「稼ぐ」ための土台は、人が住み続けたい・働きたいと思える魅力的なまちであること。これが会議を通じた共通認識です。住みたいと思っても、市街化調整区域の壁などで新しい分譲地が少なく、子育て世代が家を見つけにくい現状があります。通学路の安全や街灯の少なさといった不安も指摘されています。「近隣市町村で一番子育てがしやすい」と思えるような独自の支援策を打ち出し、安心して子育てができる定住環境をつくること。また、高齢者も安心して暮らせるような環境づくりを提案します。

提案 7 の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 近隣住民と積極的に交流し、顔の見える安心なコミュニティを作る。 ● 子育てする立場として、こうして欲しいという意見を発信していく。 ● 修繕が必要な道路があれば町に報告する。
地域の役割	● 新しく引っ越してきた住民を温かく受け入れ、地域行事に誘う。 ● 3世代が交流できるような場づくりや見守り活動を行う。 ● 自治会で一人暮らしの高齢者を把握してサポートする。
行政の役割	● 「近隣市町村で一番子育てがしやすい」と思えるような独自の支援策を打ち出す。 ● 空き家のリノベーション支援や建て替え促進により、移住者が住める場所を確保する。 ● 警察と連携して通学路の安全対策を強化し、部活帰りの夜でも安心して帰ることができるように街灯を増やす。 ● 道路の凹凸について、子どもや車いす目線で調査・改修する。

会議での住民の声

- 田原本に住むメリットを感じて土地を探していたが、半年後にやっと分譲されて住むことができた。
- 十津川村の子どもは村全体で大切にされていると感じている。田原本でもそういうあたたかさが欲しい。

4-3. 未来を育むまちづくり分科会からの提案

第1回・第2回で10年後の田原本町はどうありたいか、現状に対し何が課題かを中心に議論してきました。「人口減少への危機感」と「次世代（子ども・若者）への期待」が共通の重要事項として認識されており、住宅規制の緩和による居住促進や、働く場所の確保といったハード面の整備と、情報共有の改善や多世代交流の活発化といったソフト面のつながりの再構築が不可欠であるという方向性が示されました。第3回では、東京都豊島区での住民による子どもの居場所づくりの実践事例から、「課題を解決するための取組の0から1は市民（住民）」という学びと、「三つの間（仲間・時間・空間を揃えること）」の重要性を共有しました。

私たちは10年後の田原本町が、子どもたちが安心・安全に暮らすことができ、多様な選択を持てる環境づくりと共に、若者・働き世代（特に20～30代）が定着し、つながれるまちを目指します。

提案1

住民の経験・特技を活かした「地域に開かれた学校」と子育て支援の仕組みづくり

防犯対策の強化により、かつてのように地域の大人が気軽に学校に関わるのが難しくなっています。一方で、登下校の見守りにとどまらず、住民の豊かな経験や特技を授業や部活動に活かしたいという声もあります。また、子育て世帯が地域で孤立しないよう、公民館の開放や預かりボランティアなど町全体で子どもを育む文化の醸成が不可欠です。学校、子育て世帯（子ども）、住民の双方向の信頼や関係性を築き、負担なく継続できる仕組みづくりを提案します。

提案1の実現に向けてそれぞれが行うこと

個人の役割

- 登下校の見守りを行う。
- 定年後、保育士資格を活かして子育て広場や預かりボランティアなどに参加する。
- 自身の特技（野球、読み聞かせ、ミシン等）を授業等で提供する。
- 公民館の行事に参加する。
- 「何かあったらお互いさま」と言える関係づくりを、挨拶や立ち話から始める。
- 関係性ができた上で、近所の子どもを一時的に預かるなど、無理のない範囲で手助けを行う。

地域の役割

- 自治会の公民館を、子育て広場ができるように提供する。（自治会に加入していない方も参加できると良い。）
- 町内に親族がいる人もいない人も「1人で子育てしなくていい、地域で子育てする田原本町」をアピールしていく。
- 「気軽な預かり」の範囲として、小学校低学年を対象とした外遊びや宿題の見守り程度に取り組む。
- いきなり役割を求めるのではなく、信頼関係を築くための「お見合い」のような交流の場（お茶会、イベント）を設ける。

	● 「助けてほしいこと」を具体的にわかりやすく発信する。 ● 地域の里親制度を実施する。 ● 元教員の方などを講師にして、田原本町のよさ、歴史を感じられるフィールドワークの実施（できれば春夏秋冬1回ずつ）。
行政の役割	● 活動に伴う責任（事故や怪我）に対する保険や制度を整備・周知し、住民の不安を取り除く。 ● 預かりでは、事前のレクチャー（現代の子育て知識の共有）、トラブル時の窓口機能などのバックアップを行う。 ● 預かりでは、スタッフ用ビブスや名札などを用意して、子どもも、周りから見て大人も安心できるようにする。 ● ピンポイントではなく、プレママパパ教室や離乳食教室などの段階から、地域の人と子育て世帯が顔見知りになれる機会を作る。 ● 「ファミリーサポート制度」等の公的な仕組みと、地域の助け合いを接続する支援を行う。 ● 子育て広場だけでなく、親と子の絆づくりプログラム(BP プログラム)などで、子育て世帯がつながるきっかけを提供する。 ● 行政がリーダーシップを発揮し、学校と住民のボランティアをつなぐコーディネートを行う。 ● 専門家でなくても関われる「隙間」のボランティア募集を具体的に発信する。 ● 「誰でも通園制度」の利用率や、子育て広場が徒歩圏内にあるなど、具体的にPRする。 ● 上記フィールドワークの情報収集、講師依頼を行う。

会議での住民の声

- （0 から 1 や最初の一步の）台風の目になるような人は絶対田原本にいっぱいいるはず。
- （預かりについて）シフトという形で何月何日何時から何時までという形だとしんどいし続かない。気軽に空いている時間を利用してお手伝いすることができそう。
- 預かりの対象は、乳飲み子や未就園児はちょっと難しく、小学校低学年ぐらいだったら相手ができそう。勉強も遊ぶのも一緒にしてあげられそう。

提案2

住民が使いこなす「居場所」への転換と、多世代が安心して交流できる場づくり

公園は遊具の老朽化や雑草の繁茂が目立ち、「今の公園はスマートフォンやゲームの魅力に負けている」という意見もあるように、子どもたちが進んで遊びたいと思える環境になっていません。また、地域の子どもと大人の日常的な接点がないため、困りごとに気づいて「おせっかい」することも難しくなっています。住民自身も草引きや見守りを担いたいという意欲を示す一方、清掃で出たごみの回収など行政のバックアップも必要です。行政が管理する「目的を持っていく場所」から、住民が主体的に使いこなす「居場所」へと転換し、多世代が自然と集まり安心して交流できる場づくりを提案します。

提案2の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 子どもを連れて公園に行き、気づいたごみを拾う。 ● 子どもや甥・姪、その友達と一緒に公園で遊び、何が必要(魅力)かを考える。 ● ラジオ体操などを公園で行い、スタンプカードなどで子どもが集まるきっかけを個人レベルでも企画してみる。 ● 公園の除草などの清掃ボランティア。 ● 公園の場所、広さ、ボール使用の可否などを把握する。
地域の役割	● 地域の人と協力して除草をしたり、綺麗な花を植えたりなど。 ● 公園清掃ボランティアのグループづくり。 ● 子どもの見守りを行う。 ● 公園でできる遊びのイベント。
行政の役割	● 遊具の点検、樹木の整備、錆びた遊具の修繕・更新。 ● 清掃で出たごみの回収、引き取りの仕組みづくり。 ● ボール遊びができる場所として、ボールが飛んでいかないネットで囲われた公園を整備する。 ● 公園の敷地内をゾーニングして、ボール遊びもできる、ベンチで静かな交流もできるといった、子どもも大人も誰もが楽しめる多機能で多目的な公園のあり方を検討する。 ● 駅、学校に道の駅からの直通バスの誘致及び公園への歩道橋の建造を行う。

会議での住民の声

- 困りごとに気づいておせっかいするにも、地域の子どものとの接点（気づく場）がない。
- 田原本で子ども食堂や絵本の読み聞かせなど、色々と活動しているグループはあるみたいだが、そのグループどうしがあまりつながっていない。
- 子どもと大人だけでなく、中高生もターゲットに見据え、その年代が集まることのできる場所があると保護者としても安心できる。

- 今の子ども達は昔の遊びをしたことがない子が多いので、交流会などで昔の遊びを取り入れてみるのは魅力の一つだと思います。おばあちゃんやおじいちゃんが優しくルールを教えてくれて、一緒に遊んでくれたら、その中で会話も生まれると思うし、そこから、後日また遊ぼうとなれば、多世代でつながるきっかけになる。

提案3

多様な働き方の選択肢の創出と、小学生から始めるキャリア教育の整備

若者の流出を防ぎ、町に活力を呼び込むためには、魅力的な就労環境の整備と早い段階からのキャリア教育が不可欠です。若者が就職を機に町を離れてしまう現状に対し、企業誘致の促進や IT を活用したスマート農業の支援など、多様な働き方の選択肢を増やす必要があります。また、職業体験の機会は、中学生時の 1 回程度に限られており、小学生のうちから地元企業や農業のほか、様々な職業に触れる機会を増やすことが求められます。子どもたちが「田原本には面白そうな仕事がある」「この町で働きたい」と魅力を感じ、夢を持てる環境づくりを提案します。

提案3の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 地域の仕事や大人の働く姿を子どもに見せる。 ● 農地の草引き等、農業を助ける形での体験を募り、受け入れる。 ● ドローンなどの新しい技術を農業や地域活動に取り入れてみる。
地域の役割	● 農家と住民が出会える交流の場をつくり、双方のニーズ把握やお手伝いへの発展を促す。 ● 授業外の課外活動として自由度の高い職業体験の仕組みを考え、協力する。 ● 職業体験で育てた作物を学校給食の食材として納入できるような仕組みを考える。 ● 地域特産の「大和野菜」などの文化を継承・PR する。 ● 収穫した野菜を使って地域で料理交流会を開く。 ● 農家や商店、工場、企業などが積極的に職業体験を受け入れる。
行政の役割	● 企業や大学の誘致を行う。 ● スマート農業（ドローン活用等）への支援を行い、若者が興味を持つ農業を推進する。 ● 若者や女性が「田原本で働きたい・起業したい」と思えるような産業振興などを行う。 ● 職業体験を中学校の 1 回だけでは希望の仕事を体験できないため、小学生からできるようにする（中学生は複数回実施、小学生は職場見学を中心）。 ● 職業体験の場を継続的に確保するために、行政が学校と地域のパイプ役となり、受け入れ先リストと受け入れのためのスキームを整備する。 ● 幼稚園・小学校からキャリア教育を行う。

会議での住民の声

- 働く場所があればみんな集まってくるし、そこからまたいろんな情報も出ますし、買い物もしてもらって町が活性化するんじゃないかと思います。

- 中学生の時に職業体験が1回あるが、1回だけでは希望の職種に行けないし回数も少ない。小学生のうちから職場体験の場があるといい。
- 息子は中学を出て、県外の高校に自分の夢を叶えに行ったが、それに対して周りから色々な事を言われて、「好きなことしたいだけなのに何でなんだろう」という疑問を持っていました。なので「それが全然いいんだよ、そういう道もあるんだよ」というのは、学校で卒業生を呼んで話をしてもらったりなど、色々な選択肢を子どもたちに見せてあげてほしいし、大人世代にも「これだってあるんですよ」と価値観を広げる話をしてほしい。
- 職業体験は、農家の方々に全ての負担を強いるのは非常に大変です。例えば高校生などが作業を補助するような形が取れば、農家にとっても大きな助けになる。さらに、協力して育てた作物を、学校給食の食材として納入するような仕組みを構築できれば、循環型のモデルとして意義深いものになる。
- 収穫時期などの繁忙期にアルバイトを募集すれば、職業を学ぶという目的だけでなく、農家の方々と若い世代が「一緒に一仕事やる」と交流する場にもなる。コミュニティ形成としても有効ではないか。
- 移転後の免許センター付近で、ドローン免許の取得ができるとスマート農業に繋がるのではないか。

提案4

若い世代が住みたくなるまちの魅力発信と、定住できる「住まい・土地利用」の環境整備

将来的な人口減少が見通される中、市街化調整区域や住宅規制により「住みたくても家を建てる場所がない」という現状が明らかになりました。ただし、単に開発を進めるだけでなく、田原本らしい田園風景や落ち着いた雰囲気を守りながら、若い世代が定住しやすくなる補助メニューや空き家の活用といった具体的な支援策の充実が必要です。加えて、子育てのしやすさや町の歴史・文化のPRなど、田原本町そのものに魅力を感じてもらうための取り組みも重要です。住まいの環境整備とまちの魅力発信の両輪で、若い世代が選んで住み続けられるまちづくりを提案します。

提案4の実現に向けてそれぞれが行うこと

個人の役割	● 空き家の情報提供をする。 ● 自分が住んでいる地域に関心を持ち、歴史に触れ、魅力ある町であることを友人・知人に話す。
地域の役割	● 土地の提供や活用について、地権者と地域で話し合う。 ● 古くから地域に住まうご高齢者から、地域にまつわる歴史を掘り起こす文化継承の機会を持ち、「田原本町が好き」という気持ちにつなげる。 ● 地域の美化（住みやすい雰囲気）
行政の役割	● 住宅規制（市街化調整区域）を緩和する。 ● 若い世代が住み続けられるように、家を購入・新築した場合の補助制度などを作る。 ● 公共施設を活用し、人を呼び込む拠点にする。 ● 資金面での子育て支援を行う。 ● 町民が自分の住まうまちの歴史に気づき、更に学ぼうと思う状況を醸成する（シビックプライドの醸成）。

会議での住民の声

- 住宅が増えるようになってほしいと思います。市街化調整区域が多いのでそれがなかなかできなくて、それを少し縮めてほしいなと思います。お米も大切ですが、住んでくれる人も大切なので、調整区域というものをもう少し考えていってくれたらなと思います。
- 「子育てがしやすいまち」というのが、人口が増えることにつながる。子育てがしやすいというのは、やはり女性の暮らしやすさだと思います。
- 住宅規制の緩和には慎重にお願いします。住宅が増え、人口が増えればいいのではなく、住みやすいと思える住環境をつくることも大切だと思います。田原本の良さでもある田畑を潰して住宅を建てるのではなく、増えている空き家を整理、利用してほしい。農業の良さは残してほしいと思います。

提案5

全ての住民が対話を通じて参画できる、開かれたコミュニティの仕組みづくり

まちづくりや地域の方向性を決める際には、対話を重ねてみんなが納得する答えを導き出す「プロセス」を大切にすることと、性別や世代を問わず多様な住民が関わることが重要です。しかし、自治会や地域の意思決定の場において女性の参加・意見反映が少ない現状があり、「みんなで」と言うと女性が消えてしまうという声も上がっています。「女性が住みやすい町は、結果として全ての住民にとって住みやすい町になる」という視点を共有しながら、新しい人が入りやすい空気感をつくる必要があります。加えて、例えば、農業体験などを通じたゆるやかな交流を積み重ねながら多様な価値観を認め合い、一人ひとりに居場所がある、温かで開かれたコミュニティの仕組みづくりを提案します。

提案5の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 課題提起することで世代をまたぎ町民との議論を促す。 ● 農業を通じて色々な年代と関わる。 ● 無意識の偏見を自覚し、新しい人の参加を歓迎する。 ● 自治会などで女性が発言しやすい環境を考える。 ● 対話を通じて価値観に共通する点を見つけようとする。 ● 自治会行事やイベントにできるだけ顔を出す、参加する。
地域の役割	● 利便性追求により生じる不都合や、失われかねない事象が無いかなど、地域課題を自分ごととして思案する時間をつくる。 ● 高齢者と子どもだけでなく、20～40代も含めた多世代が関わり、子どもが「田原本にはこんな人がある」と知れる機会を増やす。 ● 農業体験のチラシを作って回覧板に載せるなど、共通の目的で多世代が集まれる場を作る。 ● 農業を通じて磯城野高校と地域のつながりの場づくりを試みる。 ● 日常の挨拶はもちろん、溝の掃除など世代を越えて町民が交わる場を契機に、対話する機会を設ける。 ● 自治会未加入者に自治会費を「払え」と迫るのではなく、「払ってみようかな」と思える関係性を時間をかけて作る（ギスギスしないまちづくり）。
行政の役割	● 自治会、審議会などへの女性登用促進を行う。 ● 住民の「やりたい」を支援する仕組みを作る。 ● 施策や事業の実施にあたって、対話を通じて納得感のある答えを出すプロセスを大切に。また、その時間を捻出する。 ● 農業体験など、様々な人のつながりの場づくりに対して経費や物品のサポート体制を作る。

会議での住民の声

- 「みんなで」とか「多様性が」というのはものすごくいい言葉。でも私としては、そののところに固有名詞的に「女性」という言葉を入れてもらいたい。「みんな」と言うと女性も男性も、色々な性別からも入ると捉えられるが、文章になると女性が消えてしまう。
- 20～30代が田原本にずっと住み続けるということを考えると、多分、子育て世代になる。「子育てがしやすいまち」というのが、人口が増えるまちだと思う。子育てがしやすいというのはやはり女性の暮らしやすさだと思います。
- キーワードで言うならば「変わらない進化」。これから先のまちづくりの方向性を考えるときに、田原本の良さを残しつつ、時代に合わせて適応する。例えば、あぜ道を息吹の感じられる土の道のままとするか便利にするためにアスファルトで舗装するかなど。皆が同じ意見ではないので、対話を通じて皆が納得する答えを出すプロセスが重要ではないか。

「行政は情報を発信しているのに住民に届いていない」というミスマッチが、議論を通じて明らかになりました。行政からの通知や回覧板は事務的な印象が強く、「自分に関係があると感じにくい」「何をやっているのか分からない」という声が多く聞かれます。一方で、情報を受け取った住民も自らが発信者となり、口コミや SNS で広めていく双方向の動きも重要です。SNS や電光掲示板など多様なチャンネルへの展開と、直感的に「面白そう」と感じられるデザインや伝え方の工夫を通じて、情報を「届ける」から「届く」仕組みへの転換を提案します。

提案6の実現に向けてそれぞれが行うこと	
個人の役割	● 地域の色々な年代の人と関わってみる。 ● 広報誌やホームページを見て、行政のしていることを少しでも知る。 ● 住んでいる地域のことを把握し、自治会の行事などに積極的に参加する。 ● 情報を自ら取りに行き、周囲に「こんなものがあるよ」と教え合う（自分が得た情報を地域の人に共有する）。
地域の役割	● 口コミで活動の楽しさや募集情報を広める。 ● イベントや交流会に参加したくなるように、回覧板や掲示板の見出しやデザインを「面白そう、楽しそう」と思えるものにする。 ● 公民館前の掲示板や回覧板を活用する。 ● 自治会などによる地域のつながりの大切さを知ってもらう。どうして自治会に入りたくないのかなどの意見の集約も行う。 ● 行政が動くのを待つのではなく地域で動いてみる（地域で一つになるのが難しいならさらに小さな区域で一つになってみる）。
行政の役割	● 若者層、子育て層が使いそうな SNS を使って情報を伝える（LINE や Instagram など世代に応じた発信を行う）。 ● 紙媒体（チラシ・回覧板）に QR コードを掲載し、スマホで詳細情報へ誘導しやすくする。 ● 直感的に欲しい情報にたどり着けるよう HP を見やすくする。 ● 広報誌の配色やレイアウトを見やすく工夫する。 ● 回覧板なら家族が見るので、その見出しを面白そう、楽しそうと思える内容にする。 ● 公民館や役場にはあまり行かないのでスーパーや駅など目につくところに情報を示す。 ● 一方通行ではなく、意見に対するフィードバックを確実に行う。 ● 公民館活動を活発にしたい、新たなメンバーを増やしたいと考えている団体の楽しそうと思える情報を出して紹介する。

	● 公民館活動団体への入会・見学申し込みなどを運営個人のみに任せるのではなく、窓口を設置する。 ● 住民がやりたいことの情報を探したり、意見を気軽に相談できる窓口を設置し、広報紙などにも反映させる（窓口は役場のOBOGに依頼）。
--	---

会議での住民の声

- 行政側から住民に情報を発信するという形は基本になってくるが、ツールや窓口を工夫するだけでは正解はない。
- 町内の駅とかに電光掲示板みたいなものを作って、そこで、「町でこういう取り組みをしています」「ボランティアを探しています」とか、日常生活のふとしたところに、情報を発信していく。
- とても貢献したいと思う人は、役場の窓口まで「これやりたいんだけど」と言いに行くだろう。そうでなければ、例えばホームページの意見箱に意見を書いたりするだろうし、熱量によってツールも窓口も変わってくる。

提案 7

住民一人ひとりの環境美化と魅力発信で、「住んでいて良かった」と誇れるまちづくり

豊かな田園風景や歴史ある街並み、人の温かさといった「住んでいて良かった」と感じられる要素は、すでに住民の中に息づいています。一方で、道路や公共スペースへのごみのポイ捨てや景観の乱れ、食事や買い物での町外への消費流出といった課題も指摘されています。こうした魅力を守り、次世代に引き継いでいくためには、行政任せにせず住民一人ひとりが町への愛着を行動で示すことが第一歩です。環境美化への参加と地元の良さを「自分の言葉」で発信する取り組みを通じて、誰もが「住んでいて良かった」と誇れるまちづくりを提案します。

提案 7 の実現に向けてそれぞれが行うこと

個人の役割	【ごみ・環境美化】 ● 自宅周辺や散歩コース(土手など) に一つでもごみが落ちていたら直ぐに拾う。 ● 水路の清掃を行う。 ● 看板等で注意喚起する。 【町のイメージ・消費・利便性】 ● 町の行政が何をやっているのか知る。 ● 町内の良いお店を調べる。 ● 都会化していないことで、静かに過ごせる事をポジティブに捉える。 ● 交通の便が良いことを住みやすさとして PR する。
地域の役割	【ごみ・環境美化】 ● 地域の美化活動を行う（住みやすい雰囲気づくり）。 ● 地域と学校が連携した清掃活動の仕組みを考える。 ● 「田原本は何もない」というイメージを払拭し、ごみが落ちていないなど「住んでいて良かった」と言える町を目指す。 ● 堤防に花を植えたり、雑木を切ったりして景観を守る活動を行う。 ● 「この公園は〇〇ボランティアが清掃・管理しています」など、看板等で注意喚起する（看板の設置には行政も協力する）。 【町のイメージ・消費・利便性】 ● 町内のお店のマップなどを作る。 ● 田舎のゆっくりした生活を残しつつ、消費を活発にしていく。
行政の役割	【ごみ・環境美化】 ● 河川敷などの広範囲の清掃について、ボランティアと専門委託（シルバー人材等）を組み合わせる。 ● ごみ拾いを教育の一環としてカリキュラムに組み込み、地域との繋がりを作るとともに、地域全体・次世代を見据えて考える問題に昇華する。 ● 個人や地域の看板設置や清掃活動で出た泥のついたごみの引き取りを行うなど

	支援体制を強化する。 ● 駅前に喫煙所を設ける。 【町のイメージ・消費・利便性】 ● 物価高対策の支援と合わせて「地域振興券」を出す（町内消費の促進）。
--	--

会議での住民の声

- （町のイメージ）四季を感じられる田舎の田園風景とか、あとは地域の方々の温かいつながりとか。
- 生活をするには本当に便利なまちだと思う。羽ばたいた子どもが「田舎だけれど本当によかったよね、便利だったよね」と思い出してもらえるように良い面を PR したかどうか。
- 現在のポイ捨て問題の構図は、「一部の心無い人が捨てたごみを、時間の空いている高齢者や善意のボランティアが拾っている」という状態。私はこの状況を、一部の親切な方々の善意に対する搾取であると危惧している。
- ごみ拾いは、実はコミュニケーションを取りやすい作業。ごみを探し、歩きながら自然な形で会話が生まれます。「若者と高齢者との関わりがない」という課題がありましたが、合同清掃はその障壁を取り払う絶好の機会になります。

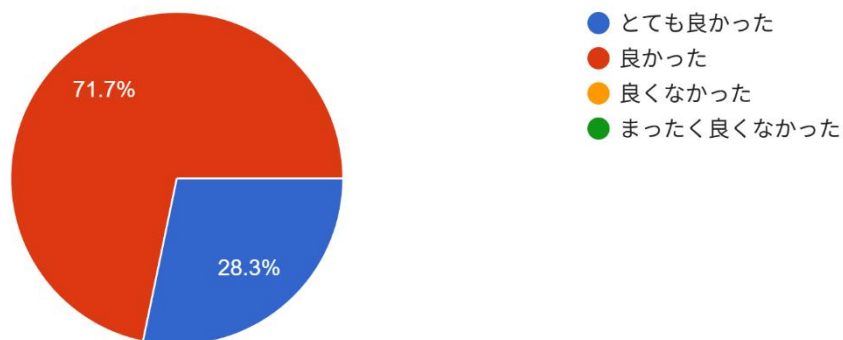
5. 参加者アンケート結果（抜粋）

（１）第１回終了後のアンケート結果

Q. 今日の会議に参加してみていかがでしたか。			
とても良かった	良かった	良くなかった	全く良くなかった
13	33	0	0
【回答の理由】 ※抜粋 ● 何か新しい風を起こせそうといった期待感が感じられたから。 ● 普段お会いすることない町民の方々との出会い、町長、役場の方々の熱い想いが身近に伝わりました。 ● めったにこんな話し合いに参加できる機会がないので、参加できておもしろかったです。 ● いろいろな世代の方と集うことはなかなかないので、その年代に応じたお話を聞かせていただきました。 ● 田原本町の現状を踏まえた今後の見通しについて知ることができたから。 ● 町長のお話で現在の町政状況をしっかり理解できたから。			

会議に参加してみていかがでしたか。

46 件の回答

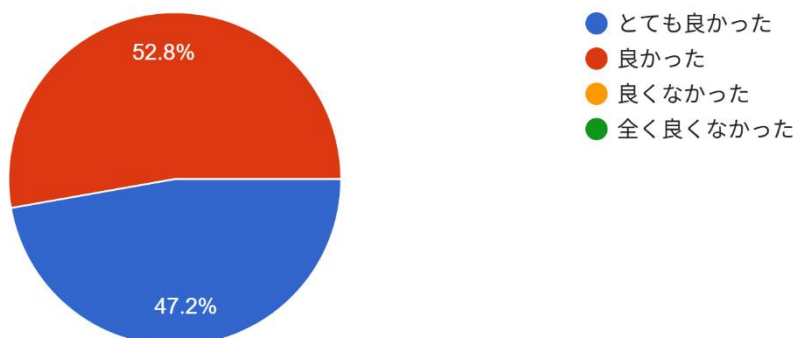


（２）第２回終了後のアンケート結果

Q. 今日の会議に参加してみていかがでしたか。			
とても良かった	良かった	良くなかった	全く良くなかった
17	19	0	0
【回答の理由】 ※抜粋 ● 幅広い年代の方と触れ合うことができ、楽しいひとときでした。 ● 2回目ということもあるかもしれないけれど、自分の意見も言えたからよかった。 ● 行政の方も多くの制約の中で腐心されることがわかりました。 ● 若い人達の考え方をきいて、田原本の未来は明るくなっていると思う。 ● 自分で気づいていない点を知ることができた。いろんなアイデアが出されて意識改革が起きた。			

会議に参加してみていかがでしたか。

36 件の回答

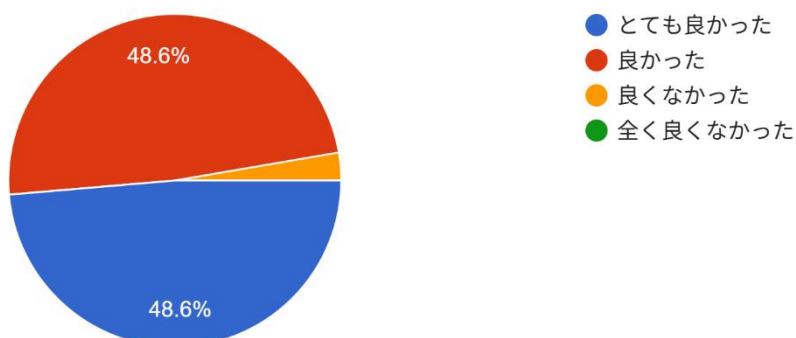


(3) 第3回終了後のアンケート結果

Q. 今日の会議に参加してみていかがでしたか。			
とても良かった	良かった	良くなかった	全く良くなかった
18	18	1	0
【回答の理由】 ※抜粋 ● 具体的な話が多くなってイメージしやすくなってきた。 ● 田原本町を良い町にしようと、みんなで考えていたから。 ● ナビゲーターの方の講話がとても刺激になりました。継続した改善活動の積み重ねが大事と気づかされました。 ● 行政主導→住民との協関係へとつなごうとする意識が見えた。 ● 自分の中でも漠然としていたことを、少しずつ具体的に考えていこうと思う。気づきやきっかけになった。 ● 幅広い年齢層の方の話をたくさん聞いて良かったし、思っていたよりも皆さん発言されていて良かったと思います。			

会議に参加してみていかがでしたか。

37 件の回答

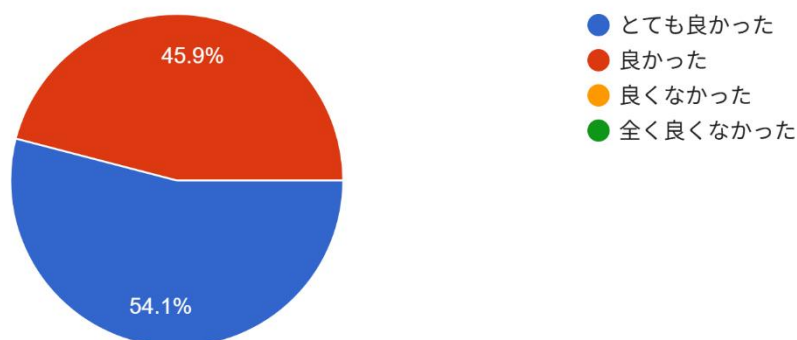


(4) 第4回終了後のアンケート結果

Q. 今日の会議に参加してみてもいいか。			
とても良かった	良かった	良くなかった	全く良くなかった
20	17	0	0
【回答の理由】 ※抜粋 ● 参加された一人一人が田原本町をより良くしたいと思う熱い気持ちが読み取れたから。 ● 私たちの意見をキチンとまとめていただいた上に、さらなる意見集約をしてくださって、みんなそれぞれの思いを活かしてくださったと思います。 ● いろいろな方々の意見を聞かせていただき、特に自治会問題はどこも同じだなあと感じました。 ● 町の考え方、やりたい事がわかりよかったです。 ● 数回の検討結果をしっかりと総合計画にまとめていただいていた。 ● 幅広い年齢層で女性比率も高く、田原本町の印象が良くなった。田原本町の事を自分ごととして考えるきっかけになった。 ● 子どもでは分からない大人の免許センターなどの問題なども聞けてまた親にも話してみたいと感じたから。			

今日の会議に参加してみてもいいか。

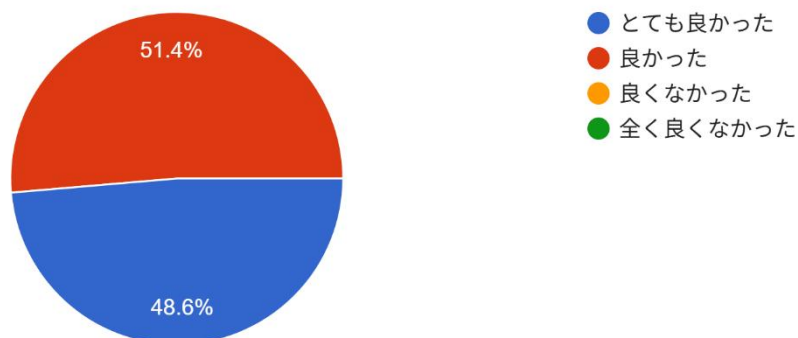
37 件の回答



Q. 各分科会のテーマは、住民が考える内容としてどう思われますか。			
とても良かった	良かった	良くなかった	全く良くなかった
18	19	0	0
【回答の理由】 ※抜粋 ● 一人ひとりはある程度いい、こうだったらいいと思っているが、それを言葉にすることは難しい。わかりやすい分野にまとめていただき、自分ごととして捉えやすかったです。 ● 自分だけの町ではなく、たくさんの人が住んでいるという意識ができるようになった。 ● いずれも、ひと(町民)が長き暮らしを営むうえでコアとなるテーマと感じたから。 ● 実現は難しいかも知れないが可能性のあるものが多く 10 年後を楽しみにしています。			

各分科会のテーマは、住民が考える内容としてどう思われますか。

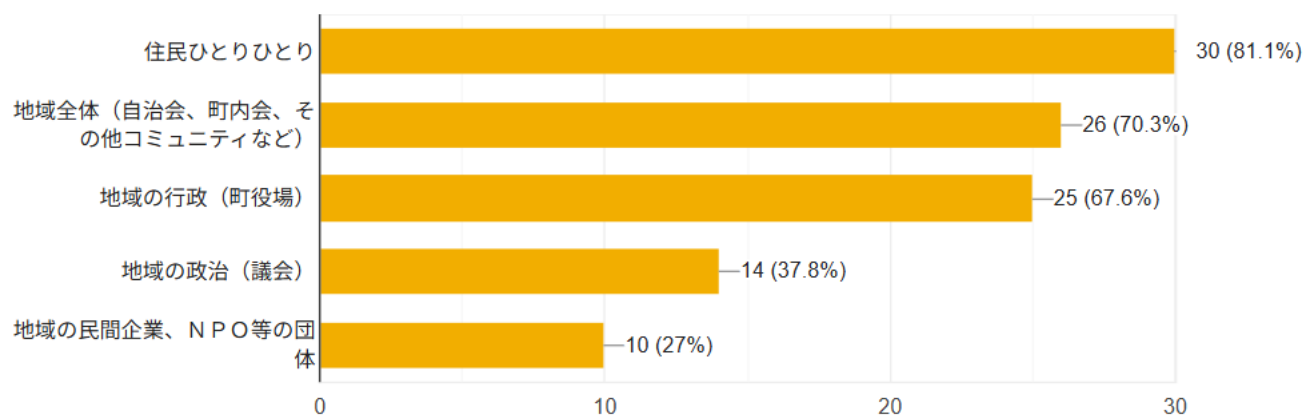
37 件の回答



Q. 町を住みやすくするために、主体的に行動すべきだと思うものは次のうちどれですか。 (複数回答可)				
住民ひとりひとり	地域全体（自治会、町内会、その他コミュニティなど）	地域の行政（町役場）	地域の政治（議会）	地域の民間企業、NPO等の団体
30	26	25	14	10
【回答の理由】 ※抜粋 ● なにか新しいことをするときには人との助け合いが必要だと感じています。なので地域全体で協力しながら行動するのも良いと思います。 ● 行政にまかせるのではなく自分達でどうしたら町が良くなるか考えさせられた！ ● 主体的に行動すべきは行政であり住民の行動は+αである。 ● まちづくりに参加していきたいです。 ● 行政と自治会が一体となって行動していきたい。				

町を住みやすくするために、主体的に行動すべきだと思うものは次のうちどれですか。（複数回答可）

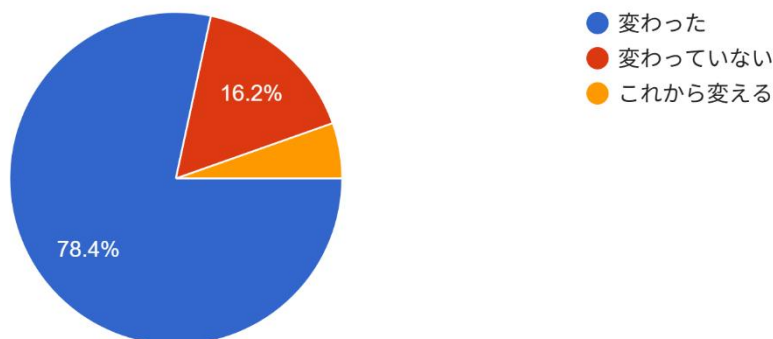
37 件の回答



Q. 会議に参加したことで、意識や行動に変化はありましたか。		
変わった	変わっていない	これから変える
29	6	2
【回答の理由】 ※抜粋 ● 田原本町に対する気持ちが変わりました。田原本町のことをもっと知って、もっと好きになりました。 ● 従来から考えていた事だが意見交換により自信持てた。 ● 自分ごととして捉えることができるようになった。 ● 広報紙をしっかりと読むようになった。町が発信していることに興味を持つようになった。 ● 近所の公園に落ちているごみを子どもと掃除した。 ● 本年度から自治会役員になるので色々考えることが出来たと思います。 ● 一人の町民として、責任をもって考えていかないといけないと思った。 ● 日々の生活の中で、田原本がどうあってほしいか、ふとした時に考えたりするようになりました。		

会議に参加したことで、意識や行動に変化はありましたか。

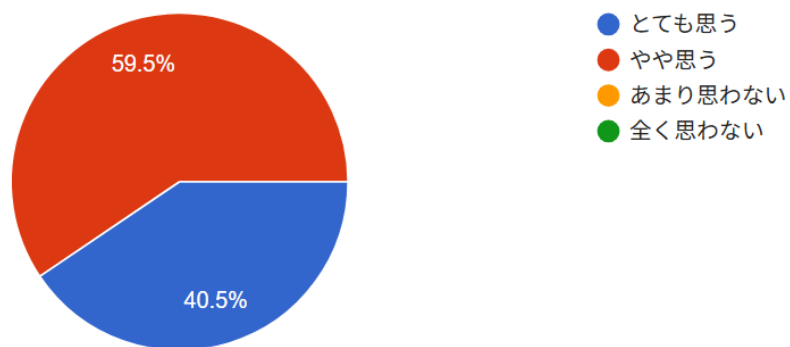
37 件の回答



Q. 今後、同じような会議（住民どうしで町の課題について対話できる場）があれば、参加したいと思いますか。			
とても思う	やや思う	あまり思わない	全く思わない
15	22	0	0
【回答の理由】 ※抜粋 ● 今回話し合われた事が具体的に実行されていれば、今後も参加させて頂きたいです。 ● 町が目に見えて良くなると思う。 ● 対話したいが自分の行きたい活動のところで参加したい。 ● 色々な課題を解決して、少なくしていきたいから。 ● 今回の会議に参加させていただき、若い方から年配の方まで多くの考えを聞かせてもらいました。視野がグッと開けたように思います。 ● まず意識すること。そして意識が変われば行動が変わる。行動が変われば結果が変わることを改めて感じたため。 ● 住みよいまちづくりに関心があり、機会があれば課題解決に知恵を絞りたいから。			

今後、同じような会議（住民同士で町の課題について対話できる場）があれば、参加したいと思いますか。

37 件の回答





田原本町住民協議会 提案書

発行日：令和8年4月

発 行：田原本町住民協議会メンバー 一同

協 力：一般社団法人構想日本

〒102-0093

東京都千代田区平河町 2-9-2 エスパリエ平河町 3F

TEL:03-5275-5607

<https://www.kosonippon.org/>

構想日本